

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第10回メディア委員会

日時：令和2年2月4日（火）14時01分～15時30分

場所：晴海トリトンスクエアオフィスY棟2A-1, 2

○日枝委員長 皆様、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

ただいまから東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の第10回のメディア委員会を開かせていただきます。

初めに、本日のメディア委員会の公開の方法でございますが、前回と同様になりますけれども、記者の方はもちろんフルオープンにいたしますが、ムービー、スチールの方は会議の冒頭のみとさせていただきますことをよろしくお願い申し上げます。

それでは早速でございますが、森会長から御挨拶をいただきたいと思います。

○森会長 御多用の中、お集まりいただきましてありがとうございます。大変御無礼ですが、着座のままで御挨拶を申し上げます。

このメディア委員会も、随分、当初から今日まで顔ぶれが随分変わりましたと言ったら大変御無礼になりますが、スタートいたしましたときは、実は理事会が発足しまして、その理事会にメディアの皆さん、マスコミの皆さんをぜひ入れてほしいという。当然だろうと思ひましてね。そこで、どなたに入っていたらこうかということで当時議論いたしましたが、テレビあり、新聞あり、通信社あり、民放あり、もちろんNHKありということで、何か3分の1ぐらい、定員の3分の1ぐらいを全部、マスコミに全部お願いしなきゃならないようなことになるような状況になりまして、改めて皆さんで御相談を申し上げて、それならメディアの皆さんだけで委員会をつくっていただいて、そして御専門のお立場でいろいろと私どもを御指導いただければありがたいということから、このメディア委員会というのはスタートいたしました。当時、民放連会長をしておられましたので、日枝さんに座長をお願い申し上げたというのが経緯でございます。

それからずっと見てまいりますと、率直に言ひまして女性の皆さんのいろんな意味での積極的な御協力、御参加が大変またオリンピックあるいはパラリンピックを盛り上げていただけることになったかと思っています。それまで大変いろいろな御意見をいただきまして、私どもとしてもありがたく、まずもって皆さんに御礼を申し上げる次第であります。

と申し上げますのは、この会も2014年9月にスタートいたしまして9回になったわけでありまして、恐らくこの会を改めて全員でオリンピックまでに開くということは、恐らくよほどのことがない限りはないだろうということで、お集まりは今日が恐らく最後になると。もちろんオリンピック・パラリンピックが終わりましてから、また改めて何らかの形で会合を持つことも、これは日枝委員長と御相談しなきゃならんことではありますが、今日は会合としては恐らく最後の会になるのかなと、こんなふうに思いますので、これまでのことも合わせて御礼を申し上げる次第です。

いよいよ開会式まで171日ということになりました。御承知のとおり、3月20日にはギリシャで聖火が採火されます。宮城県の松島基地に到着いたします。その後、復興の火として福島と宮城と岩手、順番がちょっと違っているかもしれませんが、宮城、岩手、福島ですね、そこで2日ずつ復興の火として展示されることになります。のち、3月26日に東京2020オリンピック聖火リレーが福島県からスタートすることになっております。

また、聖火台の一部、聖火リレートーチの燃料には福島県浪江町で製造される水素も活用されることになっております。またいろいろと御意見をいただければというふうに思うわけです。

今日は今年度の小中学生からのポスターの募集企画について、報告を申し上げますが、「世界の選手を応援しよう」というテーマで作品を募集いたしました。今年は過去最高になりまして、約3万8,000点の作品の応募がございました。メディア委員会の皆様には最終選考の御協力をいただきまして、本当にありがとうございました。昨年と同様に、3月上旬に有明のパナソニックセンター東京で表彰式を実施いたしますので、また御都合がよろしい方々にもぜひ足をお運びいただければ幸いです。応募いただきました作品は大会期間中に大会関連施設等に展示して、アスリートや大会関係者、観客の皆様にご覧いただき、より一層の盛り上がりをつくりたいと考えております。

以上、長々申し上げましたが、これまでの経緯、そしてまた今回で最後の締めにあたりますということをお知らせし申し上げまして、皆様の御協力に心から敬意を表して御礼の御挨拶とさせていただきます。日枝さん、ありがとうございました、どうも。

○日枝委員長 森会長、ありがとうございました。

先ほどもお話がございましたように、当委員会が、2014年9月16日にメディア委員会スタートいたしてから、早いもので今年でいよいよオリンピックが始まる年になりました。細かいことを言って申し訳ございませんが、オリンピックまで171日、パラリンピックまで

203日というふうに迫ってきたわけでございます。これまで多くのアクションの成果、未来につながるレガシーが生まれております。皆様の御協力に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

森会長の御挨拶にもございましたように、今日のメディア委員会が当委員会としては最後になります。ぜひ皆さん、最後のアイデアをお出しいただきたいと思います。また、森会長からお話ございましたように、皆様に御協力いただきました、世界を応援しようという、小中学生に募集したポスター展について、過去最高の点数が集まりまして、いずれ投票結果につきましては事務局から御報告させていただきたいと思います。本日のメディア委員会では2019年の組織委員会の活動報告や東京2020参画プログラムの現状、被災地での取組、アクション&レガシーレポートなどについて、報告させていただきたいと思ひます。

組織委員会といたしましては、多くの国民に大会に参加していただきたく、大会まで残された時間はわずかでございますけれども、これまで以上に盛り上げ、人々の参画をつくり出すためにどうしたらよいか、また大会を契機に生まれたレガシーを大会後のレポートにどのように取りまとめていくかについても皆さんの積極的な御意見をいただきたいと思ひます。

それでは、次に、先ほども森会長からお話ございましたように、この委員会もスタートから大分メンバーも変わっておりますが、前回からまた今回で変わった方がおりますので、6名の委員の方が人事異動等で変わりましたので、名簿順に、お手元に名簿がございますけれども、名簿順に一人ずつ、呼びいたしますので、その場でお立ちいただければ大変幸いです。

まず、株式会社テレビ東京広報局次長兼広報部長、天田晶子委員。

株式会社エフエム東京編成制作専任局長兼報道・情報センター部長兼国際部長、石井育子委員。

株式会社テレビ朝日スポーツ局スポーツ業務推進部プロデューサー、小林麻衣子委員。

スカパーJSAT株式会社執行役員メディア事業部門コンテンツ事業本部長、手塚久委員。

また、本日は御欠席でございますけれども、産経新聞社上席執行役員営業統括、総合メディア戦略担当、鈴木裕一委員。

日本経済新聞社常務取締役、吉田透委員。

以上、6名の方に新たに加わっております。

新委員の皆様は、残り少ない日にちでございますけれども、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

また、本日は内閣官房から臨時委員をお迎えしておりますので、御紹介いたします。

東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局推進統括官、伊吹英明委員でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、先ほどから何回も申し上げますけれども、当メディア委員会は今日が最後でございます。これも一つのレガシーでございますけれども、せっかくでございますので、メディア委員の皆様と、森会長以下、全員で記念撮影をしたいと思ひます。撮りました写真は組織委員会のホームページにも出させていただきますと思ひます。また、取材のカメラマンの方もどうぞ取材いただいて、お出しいただければ大変幸いだと思ひます。

それでは事務局、お願ひします。

○小林（住）部長 それでは、少し御移動していただきたいと思ひます。

（写真撮影）

○小林（住）部長 よろしいでしょうか。それでは、お戻りいただければと思ひます。

○日枝委員長 皆さん、お疲れさまでございました。ありがとうございます。

それでは、組織委員会の事務局からの説明をお願いしたいと思ひますが、前回に引き続きまして今回の委員会でも、全ての議題について、まず事務局から御説明させていただきます、その後、委員の皆様から御意見をいただきたいと思ひます。

では、早速ですが、資料に基づいて事務局から説明をお願いいたします。

○伊藤CF0 それでは、資料に基づきまして説明させていただきます。着座のまま失礼いたします。

資料のほう、メディア委員会資料と表紙に書いてあるものを1枚おめくりいただきたいというふうに思ひます。

まず、2019年の主な活動報告についてでございます。

委員の皆様、御案内のように、着実にこの1年間も準備を進めてきたところでございます。職員数、下のほうで行きますと12月1日、昨年12月1日時点で3,200人ということでございますが、今年1月1日には3,344人になってございます。また、この2月1日から、少しずつでございますが、会場のほうも完成してまいりましたので、venue化ということで、晴海トリトンではなく、各施設ごとに徐々にvenueのほうに職員も移動しながら本番を迎える準備

を進めているところでございます。

1枚おめくりいただきたいと思います。

下のほう、4ページのほうで競技会場の状況でございます。

御案内のとおり、オリンピックスタジアム、国立競技場のほうも昨年の暮れに完成いたしましたして、年明けから大きなスポーツイベントを実施しながら準備を迎えているところでございます。現在は私どもの開会式また競技に向けて仮設工事に入っているところでございますけれども、着実に予定どおり準備が進んでいるところでございます。

また選手村、写真のほうは予定地ということで何もなくて恐縮でございますが、このすぐそばに今はしっかり宿泊棟が完全に完成してございます。また、先般には各都道府県また市町村のほうから御寄贈いただきました材木、木材を使ってのビレッジプラザのほうも内覧というところの運びまで完成したところでございまして、着々と選手を受け入れるハード的な準備が進んでいるところでございます。

あわせて、昨日発表させていただきましたが、選手村の村長、村長代行、副村長のほうに御就任を、川淵村長以下、御就任をいただきまして、これも選手第一、アスリート第一の観点で受け入れ準備態勢を進めているところでございます。

1枚おめくりいただきますと、競技スケジュールでございます。

オリンピック・パラリンピックとも、それぞれの競技の日程が固まり、今それぞれの競技の予選等も本格的に実施されているところでございまして、これから逐次、それぞれの日程の中での対戦相手なども決定していくという段階になってございます。

1枚おめくりいただきますと、テストイベントの関係でございます。

テストイベントは昨年の7月から本格的に、それぞれの本番を見据えた中で、どのような課題があるかという運営のテストを実施させていただいてございます。現在、WAVE2ということで、10月から2月までかけて、それぞれの競技について、またテストイベントを実施しながら運営に向けたどのような課題があるかということの一つ一つ検証しているところでございます。

また、この後、WAVE3という形で私どもの大会に向けて、新しくつくった施設が完成してまいりますので、こうした施設で実際のテストイベントを実施しながら本番に向けた課題解決に取り組んでまいりたいと思っております。

そのテストイベントを通じて私どもが課題として気づいた点、そして改善していく点として、最も大きなところが8ページ目の暑さ対策の部分でございます。

暑さ対策については、我々も従前から重要な課題ということで対応をとっておりましたが、やはり昨年の夏のテストイベントを踏まえて、これまで以上の暑さ対策をしっかりとしなければいけないだろうということを新たに気づかせていただきました。アスリート向け、観客向け、また大会スタッフ向け、それぞれの観点から、とり得る策は何でもとっていいのではないかと、こういう形で追加対策を実施する準備を進めているところでございます。また今後、情報発信という形で、実際に見に来ていただける観客の方も含めて、積極的に暑さ対策に有効な策、また心得ておかなければならない点などについて、しっかり発信していきたいというふうに思っております。

1枚おめくりいただきまして、開・閉会式に向けては現在着々とコンセプトというものを演出企画体制のチーム、野村萬斎さんをトップとするチームの皆様にご検討いただいているところでございます。

聖火リレーにつきましては、先ほど森会長の挨拶の中でも申し述べましたけれども、3月20日に宮城県航空自衛隊松島基地に聖火が到着した後、復興の火として岩手、宮城、福島県の3県で展示した後、3月26日、福島県のJヴィレッジをグランドスタートといたしまして、全国を回っていただく予定になっているところでございます。

次のページでございますが、聖火リレーのほう、これも御案内のとおりデザインも決まり、ユニフォームも決まり、聖火ランナーについても募集を終え、ほぼ決定させていただいたという運びになってございます。これから3月下旬に向け、徐々に大会、聖火リレーの開始に向け、日本全国が大きく盛り上がっていければというふうに考えてございますので、メディアの皆様のお取り上げの中でも、また引き続きよろしくお願ひできればと思っております。

その機運醸成という観点では、聖火リレーのみならず、さまざまなイベントを皆様の御協力もいただきながら、東京2020参画プログラムという形で展開してございます。また、文化オリンピックの観点では東京2020 NIPPONフェスティバルということで、文化の発信、新しいものの創造、そして発信というものをしていくということ、組織委員会としては四つの主催事業を中心に、さまざまな団体と共催で多くの取組を進めていきたいというふうに思っております。

次のページ、子どもの参画という形でございます。

これも皆様からさまざまな御示唆をいただきながら、大会機運醸成、未来を担う子どもたちにできるだけ多くの御参画をいただきたいということで、大会マスコットの決定にお

加わりいただくことを初め、全国の学校にオリンピック・パラリンピックムーブメントというものを広げるため、さまざまな取組を進めているところでございます。

今日また後ほど御説明させていただきます、御審査いただいておりますポスターにつきましても、まさにこうした観点から、子どもの参画で、全体でエンゲージメントを盛り上げていこうということで、取り組んでいるところでございます。

次の持続可能性につきましては、「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」、また選手村の中でつくるビレッジプラザの「日本の木材活用リレー」、さらには「みんなの表彰台プロジェクト」ということで、表彰台についても海洋プラスチックなどを活用しながら、使用済みプラスチックの再生利用を基本に、SDGsの観点から持続可能な大会の実施ということの一つのスローガンとして取り組んでまいりたいと思っております。

次のページでは、大会ボランティア、また大会チケットという形で記載してございます。大会ボランティアについては本当にたくさんの方々に御応募いただきました。現在、研修に入っているところでございますが、本当に多くの方に御協力いただけるものですから、研修も1カ所、1日で終わるようなものではなくて、全国各地で、これから大会に向けて毎日のように、それぞれ研修を実施しながら、大会本番に向け、準備をしていただく形になってございます。

大会チケットについては、言わずもがなでございますが、大変高い関心を国民の皆様にお持ちいただきまして、今、パラリンピックの2次の抽選の受付まで終わったところでございますが、恐らくオリンピック・パラリンピックとも、過去にないほどの事前の高い関心というものが、チケット抽選に皆様に応募いただいている状況に反映できているのではないかとこのように思っております。

11番としては、メダルデザイン。これも皆様御案内のとおり、東京大会にふさわしいメダルという形でデザインを決めていただきまして、またメダルについては視覚に障がいのある方にも配慮するようなさまざまな工夫も凝らし、メダル、リボンのデザインを決定させていただいたところでございます。着々と大会に向けた準備が現在進んでいるところでございます。

次に、東京2020参画プログラムについて、御報告させていただきたいと思っております。

1枚おめくりいただきまして、19ページ以降を御覧いただきたいと思います。

本番に向けて、日本全国の機運醸成を図るという形で、さまざまな主体の方に積極的に主体的に関わっていただくということで、東京2020参画プログラムを実施してきていると

ころでございますが、昨年12月の時点では47都道府県で13万9,000件のアクションを認証したところございまして、14万、15万というような形で、これが全国に大会までに広がっていくというふうに思っております。

以上で報告1、報告2の説明を終了させていただきます。

○日枝委員長 それでは引き続き、復興に関する取組について、事務局からお願いいたします。

○伊藤CF0 では、すみません、恐縮でございます、引き続き説明させていただきます。

1枚、今の資料をおめくりいただいて21ページ以降、復興に関する取組を記載させていただいております。

メディア委員会の皆様には、復興に関しましてさまざまな御指導、また御知見を御提供いただいたところございまして、私ども、本大会の源流である復興というものを絶えず意識しながら、さまざまな取組を進めているところでございます。

まず、オリンピック聖火リレーにつきましては、先ほどの説明と若干重複するところもございしますが、トーチについて、東日本大震災の仮設住宅のアルミを一部使用するとともに、聖火については宮城県航空自衛隊松島基地にまず到着する、その後、復興の火として展示した後、3月26日からJヴィレッジをスタートとし、グランドスタートを切るという形としてございます。

また、その下、22ページでございますけれども、先ほど会長の挨拶の中でも申し上げましたが、聖火台や聖火リレートーチには世界最大級の再生可能エネルギー由来、水素製造施設が設置されます福島県の浪江町で製造された水素も活用することとしてございます。また、競技のほうも福島あづま球場・宮城スタジアム、ここで実施する。また、メダリストにお渡しするビクトリーブーケにつきましても、被災地で育てられた花を使用するということを決定させていただきました。

1枚おめくりいただきたいと思います。

次に、東京2020復興のモニュメントというものを今回、実施させていただくことにいたしました。コンセプトとしては被災地から世界へということで、感謝、応援、支援への感謝や選手への応援の気持ちを伝えるモニュメントを作成し、そこにまた世界から被災地へという形で、参画したアスリートにサインなどをいただく形で、応援への感謝やスポーツの持つ力を逆に被災地に届けるという、双方向のモニュメントの制作を進めているところでございます。このモニュメントにつきましては、先ほどのトーチと同様、仮設住宅の窓

などのアルミ建材を回収し、再生アルミとして利用するとともに、実際の制作に当たっては東京藝大の学生さんと被災地の中高生が共同しながらワークショップでモニュメントの制作、メッセージの制作を進めているところでございます。

24ページのほうに、決定したデザインのイメージを記させていただいております。

岩手、宮城のデザイン、また福島県のデザイン、この2種類のデザインが実際の高校生等を選んでいただいたものでございまして、これらに高校生のメッセージを今記載してもらうという形で制作に入ったところでございます。

さらに、次のページを御覧いただきます。

文化オリンピック、NIPPONフェスティバルの中ではテーマの一つとして「しあわせはこぶ旅 モッコが復興を歩む東北からTOKYOへ」ということで、全長10メートルの巨大人形が復興を歩む東北の現在、東北の文化と魅力を世界に発信していくということで、被災3県でのイベントを実施しながら、東京にやってくる。そして、各地で託されたメッセージを世界に発信していく。このようなコンセプトのもと、現在、文化オリンピックの一つの事業を検討しているところでございます。

26ページには足取り、岩手県、5月9日から始まりまして、途中、東北絆まつりの会場にも立ち寄りながら、福島、そして東京へと向かう、このような形で巨大人形が一つの大きな話題とともにオリンピックを盛り上げていく形にしております。

さらに、1枚おめくりいただきますと、被災地メディアツアー実施の報告でございまして。

昨年の8月から9月にかけて、福島県、岩手県、宮城県で在京している海外メディアの皆様を対象に、それぞれの被災地の今、そして復興している様子というものを見ていただくツアーを実施いたしました。詳細についてはまた後ほど、このツアーに御参加いただきました委員の皆様からも御意見をちょうだいできればと思っておりますけれども、このような事業を展開しているところでございます。

説明は以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございました。

それではここで、被災地メディアツアーに御参加されました渡辺委員より、感想など、御意見をお願いしたいと思います。

○渡辺委員 渡辺でございます。今日は御時間をいただきまして、ありがとうございます。

今回、8月の福島、岩手、そして9月の宮城に参加させていただきました。非常に有意義だったと私は思っております。

写真を用意いたしましたので、御覧いただければと思います。

私ごとで恐縮ですが、2011年3月は朝日新聞社で写真部長をしておりまして、その意味からも被災地に思う気持ちは結構高くございます。今回、福島そして岩手、そして宮城と回りましたので、御覧いただければと思います。

まず、2日はJヴィレッジに行きました。Jヴィレッジは1F（東京電力福島第一原子力発電所）の事故後の収束施設として、海外のメディアの方も相当な関心を持っていらっしゃいました。2018年7月に7年4か月ぶりに再開したところでありますので、緑豊かなグラウンドが戻ったところが、非常に印象的だったと思います。

次、お願いします。

この日は子どもたちがキャンプをしまして、夏休みということもあり、サッカーを楽しむ子どもたちが多く見受けられて、元気な姿を取材でき、海外の人たちも非常に喜んでおりました。

次、お願いします。

これは、なでしこジャパンのゴールキーパーであった増田亜矢子さんという、今は東電の福島第二原発の広報にいらっしゃる方です。3月11日当時は東電広野火力発電所にいらっしゃったそうです。その後、広野町役場に出向されて、被災者に寄り添っていたという話をお話しされて、結構長い時間、海外メディアの方が熱心にインタビューをされていました。

次、お願いします。

復興の現状というのは、海外のメディアの方の関心事でした。福島の担当者、県の担当者とか、いろんな方に質問攻めというところでもあります。

帰りの車窓で――次お願いします。

これは大熊町、一部避難指示が解除されましたけど、大川原地区。今春、役場などが大熊町にやっと戻りましたけども、まだ人口はわずかです。こういう場所も常磐自動車道の車窓から海外のメディアの方も見つめていたところでもあります。

これは翌日です。県営あづま球場を皆さんが訪ねたときです。当時は完成度がまだ90%、人工芝に張りかえて、暑さ対策とかが非常に懸案ということになっていました。

次、お願いします。

みなさんが一番喜んだのはここです。世界の王に会えたということでしょうか。少年野球のキャンプ中でしたが、世界の王さんにここで生の声が聞けたことは非常に盛り上がり

ました。王さんにオリンピックへの取組みとかを聞いていたのが印象的でした。

岩手県です。

岩手県は、台湾の子どもたちを招いたキッズトライという親善試合をしていたところに我々が伺いました。

釜石の野田市長がオール・オブ・ワンというラグビー精神に強く共感され、復興精神に共通している部分が、我々も安心して暮らすことができるという意味において、非常によかったと伝えていました。

これが野田市長でございます。

釜石の鶴住居復興スタジアムですが――次、お願いします。

ここは鶴住居小学校と釜石東中学の2カ所が津波に襲われて、その跡地に、皆さん御存じのようにラグビー場ができました。ここのハイブリッド型の天然芝というのは世界に誇るトップクラスだということで、海外メディアの方も、はだしになったりしながら、感触を楽しんでいました。

釜石市だけでも1,000人の方の尊い命が奪われたところではありますが、津波の現場を訪れたメディアの方々がそのときの様子を皆さんに聞いたりして、取材されていたところが印象的でした。

三陸鉄道です。三陸鉄道のレトロ列車に当日、中村一郎社長が駅員の格好をされて乗車されました。釜石から盛まで、50分のメディアツアーで、いつもと違った雰囲気を楽しむことができたことはよかったと思います。

翌日、陸前高田に伺いました。陸前高田の奇跡の一本松を目の当たりにして、できたばかりの高さ12.5メートルの防潮堤の上から、まちの変わりようを体験されていました。

当日、副市長の岡本さんが来られて陸前高田では1,558人、行方不明者202人、1,760人の犠牲者がいることを紹介。皆さんもそこに突っ込んで聞き及んでいました。

ここでいろいろ話をしている中、通訳の方が少しだけ通訳の難しさをもらしていました。というのも、海外メディアの方は、行方不明者の方は海の中にいるんでしょう、とストレートに聞かれ、そういうときに何と答えていいのか、非常に困ったと言っていたのが、私は印象的でした。

被災地メディアツアー、最後となる9月14日から、宮城スタジアムに伺いました。

宮城スタジアムは5万人収容のスタジアムで、東京2020五輪では10試合のサッカーの試合が行われます。

メディアの方は改修中の様子をいろいろな角度から撮影します。これは360度写るカメラですが、ウェブを意識した見せ方など、多角的に発信しようとする意気込みを感じる事ができました。

ここ、宮城スタジアムの説明によりますと、東日本大震災で屋根の支柱37本のうち27本に亀裂が入ったそうで、やっと改修工事が終わり準備万端ということでした。

ここ宮城スタジアムの立地は利府町なのですが、利府町の特産は何と梨だそうで、梨を使ったジュースなどでもてなされ、おもてなしの精神があったと、記者の皆さんは喜んでいました。

地元のメディアから逆取材を受けるという場面も多々ありまして、国際交流という意味でも、やはり知っていただく機会があったほうがいいのではないかと思います。

今回、海外メディアのツアーに参加した感想ですが、東日本大震災の被災地を知ってもらい、とてもいい機会だったと思います。語るのと伝えること、言葉の壁というか、真意をどう伝えるかというのは結構難しい問題ということも感じました。その意味では、空気感を味わってもらい大切さというのは現場です。このような機会をつくることは大変有意義です。

行政側のみならず、もう少し市井の人の声が聞けるチャンスがあったらいいのかもしれないとも思いました。海外メディアの関心度にもよりますが、このようなツアーがより幅広くあり、また取材したいと思うメディアの人たちにいろいろな門戸が開かれているというのが大切だと思いました。

御清聴ありがとうございました。

○日枝委員長 渡辺委員、ありがとうございました。

それでは引き続き、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けたポスター募集の企画につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

○小林（住）部長 それでは、資料に戻りまして、29ページを御覧いただけますでしょうか。

東京2020オリンピック・パラリンピックに向けたポスター募集企画についてでございます。既に御説明がありましたように、今回のテーマは「世界の選手を応援しよう」というものでございます。募集対象はこれまでどおり小学校5年生、中学校2年生としまして、学校ごとに50作品に1作品を代表作品として御提出いただきました。

応募状況は過去最高の3万7,804点になりました。この活動が年を経るに従ってどんどん

盛り上がってきているなということを実感いたしました。

今後でございますけれども、本日、皆様の投票を全て集めさせていただきまして、事務局のほうで集計させていただきます。その上で、各ジャンルごとに金・銀・銅が各1点、そして優秀作品5点を選出させていただきたいというふうに思っております。

めくっていただきまして、31ページでございますけれども。

表彰式のほうでございますが、こちらの日程としましては3月7日の土曜日、本年度、聖火リレーが始まる関係で例年よりも早いタイミング、春休みになる前ということで、週末の日程になっております。場所はパナソニックセンター東京、そしてこちらには金・銀・銅賞の受賞者、合計で12名の方に来ていただく予定にしています。

主催者側としまして、森会長、日枝委員長、そしてアスリート委員等の出席をいただく予定でございます。

今回の入選作品につきましては、パナソニック東京にて掲出させていただきたいと思えますし、既にパートナー企業等からさまざまな商品を御提供いただいております。

今後の活用ですけれども、組織委員会はもちろんですけれども、自治体あるいはパートナー等で子どもたちのポスターを積極的に御活用いただくよう、働きかけたいと思えますし、大会時も大会関連施設で、このポスターで大会を盛り上げていくことを計画しております。

以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。

それでは最後に、アクション&レガシーレポートについて、事務局から説明をお願いいたします。

○伊藤CF0 それでは、資料のほうは別刷りでございます、アクション&レガシーレポートについて、概要資料と、こちらのほうを1枚お開きいただきたいというふうに思えます。

本日の専門委員会でお伺いしたい内容でございますが、アクション&レガシーレポート策定に向けて、今の骨子から少し、このような方針で執筆していきたいというところを今日御提示させていただきます。これを踏まえ、各委員の皆様から、今後の実際の執筆に向けて、さまざまな御指摘、御意見を幅広い観点から頂戴できればというふうに思っております。

アクション&レガシーレポート暫定版の構成でございますが、2ページのほうを御覧ください。

「はじめに」から始まりまして、それぞれの専門委員会で所掌してございます各分野につきまして、レポートをまとめてまいりたいというふうに思っております。本委員会では、特に第六章のところの「復興・オールジャパン・世界への発信」について、執筆する部分について、御意見を頂戴できればというふうに思っております。

1枚おめくりください。

第一章は全体的な視点という形で、総論的な形で取り組んでまいりたいというふうに思っておりますが、その視点といたしましては、全体としてオールジャパンでの取組、多くの方々が参画し、日本全体で盛り上げる体制を構築しながら、また組織委員会が行った事業だけでなく、関係団体と連携しながら取組を推進したことなどを記述してまいりたいというふうに思っております。

具体的には第六章「復興・オールジャパン・世界への発信」のところ、次のページを御覧いただきたいと思っております。

復興に関しましては、基本的には被災地の姿を世界に示す絶好の機会ということで、復興に向かう今の被災地の姿を示すとともに、震災時に世界から受けた支援に対する感謝の気持ちを示す場となるように取り組んでいく。

また、オールジャパンについては、日本全体にポジティブな影響をもたらすように取り組んでいく。

さらに、世界への発信については、大勢の外国人を日本に呼び込む機会となるように取り組む。

こういう三つの基本的な考え方に基づいて、さまざまな取組を実施したことを基本的な考え方として記させていただくとともに、具体的には復興、オールジャパン、世界への発信、それぞれについて、どのようなアクションを行ったのか、そして実績、成果としてどのようなものが数値で見えるよう中で残っていったのか、さらに今後のレガシーとしてどのような形で展開させていくのかということ、それぞれの項目、具体的に取組んだ内容の記述なども具体化しながら、これらの観点で肉づけをしてまいりたいと思っております。

特に実績や成果の部分については、必ずしも全ての指標が数字で書かれるものではないかもしれませんが、できる限り数値なども、政府や都などと協力しながら、指標を用いて、目に見える形で成果をまとめて、レガシーとして次につなげていければというふうに思っているところでございます。

最後、もう一枚お開きいただきたいと思います。

今申し上げたような形の方針に基づきまして、全体文案のほうを事務局のほうで、まず作成させていただきます。大会後、パラの大会後、1カ月後を目途に、10月中には私どもの素案のほうを各委員の皆様にも御覧いただき、そして委員長のほうに御確認いただきたいと思っております。

御意見を踏まえまして、11月から12月末までの間にアクション&レガシーレポートを日本語、英語、両方で公表できればというふうに考えているところでございますけれども、さまざまな観点で各メディアの皆様、最も効果的な発信の仕方という観点に関しては、皆様はまさに御知見のあるところでございますので、今日、また今日の後でも結構でございます、御指導を賜ればというふうに思っております。

説明は以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。

先ほどから数々の御報告をいただきまして、皆さん、何かこれに対して御意見等ございましたら、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。

はい、どうぞ。

○夏野委員 もうすぐ本番ですので、今まで引っ張ってこられた皆さん、本当にお疲れさまです。

2点あるんですけども、1点は、これから後、百何十日で何ができるかということは本当に限られていると思うんですが、ぜひ中間報告みたいなものが数字として出てきたらいいなと思っております。

例えば去年ですかね、マスコットの売り上げがかなり調子がいいという記事が出ていたんですけど、その後どうなったのかなというのにみんな関心があるんですが、多分結構、例えばロンドンとかに比べて好調なんじゃないかとか。

あるいはチケット、私もチケット戦略に関する有識者会議の委員をやらせていただいて、全部外れましたけども、売り上げは好調なんじゃないかなと思うんですが、オリンピックの開催前に、例えば4月とか5月の段階でこんな感じになっていて史上最高ですというふうに言えると、ますます盛り上がりがあると思うんですね。

そういう売り上げとか個数とか、チケット数だけじゃなくて、例えば初めてのことをこんなにやっていますとか、そういう今までのオリンピック史上やっていないことを東京大会ではもうこれだけやっています、みたいなものでもいいので、ちょっとアクション&レ

ガシーレポートのまだ終わっていない版というか、中間報告みたいなものを少し発表していただくと、機運が盛り上がるんじゃないかというのが1点です。

それから、アクション&レガシーレポートに関しても、普通にこういうことをやりましたというのが後から出てくるだけではなくて、ぜひ史上初というマークと史上最高というマークをつかって、サブタイトルに18個の史上初と23個の史上最高とか、そういうサブタイトルがつくような、非常に読む前から読みたくなるような、どれだけ新しいことをやったのかというのが個数に出てくるといいなと思うので、そういう編集をやっていただいたらいかがかなというふうに思いました。

以上です。

○日枝委員長 ありがとうございます。

事務局、お答えになりますか。

○伊藤CFO ありがとうございます。

まさにそうした観点で、例えば先般も聖火台に水素を使う、聖火リレーのトーチにも水素を使う、これは史上初の試みであるということをIOC総会の場でも総長のほうから発表していただき、プレスでも発表させていただいたところでございますが、まさに今いただいた観点を踏まえて、どういう形でどれだけ効果的に出せるかということを広報局と私どもは一体となって考えてまいりたいと思いますので、また御指導いただければと思います。

○森会長 マスコットを子どもたちに選ばせたというのも初めてじゃないのか。

○伊藤CFO もちろんそうでございます。

○森会長 あれは誰かのアイデアだね。まだいっぱいあるよ、よく考えてみると。

○日枝委員長 今、夏野さんがおっしゃるように、パブリシティを盛り上げる意味からも、例えばポスターも史上最高なんですね。だけど、そうなのかと僕は思っただけで、街が本当に、子どもたちが盛り上がっているのかどうかは、実感としてはないので、こういうパブリシティをすればいいんじゃないかと私は思いますね。

○森会長 1回目だったと思いますが、大きなお尻をポスターにしてあるのがものすごいよかったな。僕がそういうことを言うといけないんだけど、公式ポスターを今やっているでしょう、専門家に。専門家より子どもたちのポスターのほうがよっぽど説得性のあるポスターを。どうして子どもたちの中から一つ選んで、それを公式用にしなかったんだろうか。誠に会長として申し訳ないなと。今から間に合うんじゃないか。子どもの中で一番いいのを皆さんで選んでもらって、公式用ポスターにしたらどうだ。だめですか。

○日枝委員長 小林さん、3回でしたか、ポスターを集めたのは、今まで募集したのは、発表したのは。

○小林（住）部長 そういう意味でいいますと5回。

○日枝委員長 その中にお尻は入っているんですか。

○森会長 入っています。本当にすばらしい、子どもの発想。

結城さん、よく見ているでしょう、あなたは。

○日枝委員長 何か結城さん、ございますか。

○結城委員 ありがとうございます。読売新聞の結城です。

レガシーというのはますます、特にIOCなどの目から重視されるようになってきて、この間、1月に参りましたときに、もうレガシーの部局をあちらがつくって、各オリンピックの、いわゆるどういう部分で難しかったところ、それからいいレガシーが生まれたところ、後に残ったところ、そういうきちとした評価をIOC側でもやっていこうと、今まさにしているところでした。

英語でも発信なさるといふ、この文章が恐らく大きな方向性、たたき台になるんじゃないかという観点から、二つばかり差し上げさせていただきます。

一つは、ロンドンのときと同じようなレガシー、文章を読ませていただいたときに思ったのは、やっぱりどれだけ苦労したのかという部分を一番読ませるなと思ったんです。こんなにすばらしいことをたくさんしましたというのはもちろん大切なんですけども、多々ある、東京でもたくさんあると拝察いたしますけれども、むしろ後、後世の者が読むときに参考にしたいと思うときに、例えば参画プログラムで子どもたちが、自閉症とか、そういう子どもたちが楽器を使って、鍋・釜を使って演奏する、それを国際的な、別な国の子どもたちを呼んで一緒にやる、それにスポンサーがつかない、スポンサーをアンブッシュに当たらないように組織委員会が奔走して何とか取りつけるみたいな、そういう苦労が書いてあったりいたします。どうやって人々の参画をつくり出し、それがレガシーとして本当に社会に浸透していくように工夫したのかという部分が、やっぱり一番、後々読ませる、参考になる部分かなと感じています。

もう一つは、そのときに、いわゆるこういうイベントをやりました、だけではなく、それがどのように人々や社会の変化をちょっとでも作り出していったのかというのを、もう少し長いスパンも入れながら、もし必要だったらもう少し、一歩引いて別な第三者等々の評価なども後から引用できるような体制をとりながら、少し離れた観点での評価を加え

ると、非常に信憑性が増します。IOCの側などの評価というのは、そういう第三者を必ず入れて、いいところ、悪いところを必ず出しています。それがあある意味で次に本当の意味で伝わっていく、そして東京がやった苦勞、それから本当の意味でいいものをどう残そうとしたのか、その部分が伝わっていくことにもなるんじゃないかと思います。

あと、せっかく夏野さんがさっきおっしゃったので、今から後、本番までにできること。先般、選手村のビレッジプラザのときにいろいろ、遠藤先生なんか、結局、木材をその後で全部、各自治体に返して、そこで何かをつくってもらいたい、ある意味でそこから先、それぞれの自治体が何かするときの核にしてもらえれば。じゃあ、そこでそれが本当に核になるためにはどうしたらいいか。選手とかにそこでサインしてもらったらいんじゃないか、オリンピックの期間中に何かそれを象徴的な形で後に残るように工夫できたらいいんじゃないか。そういう話をされていたやに記憶しています。そういう御視点というのは本当に大事だと思います。

ロンドンの関係者なんか前に聞いたので心に残っておりますのが二つあって、レガシーというのは結局その後ずっと続ける努力がないと根づかないんだと。続ける努力というのは、組織委員会は解散なさいますので、もちろん自治体が第一義にやるんですが、自治体だけではなくて、人々の間で機運が草の根として残っていくこと、これが一番レガシーを続ける上で保障みたいなものになるんじゃないかと感じています。組織委員会はマジックダスト、魔法の粉を持っている。だから、それをキックスタートする、始める大きなキューを出すことができる。そして、キューを考えていただけるのが、工夫していただけるのが今から開会、もしくは終末、オリンピック・パラリンピックが終わるまでなんじゃないかなというふうに考えております。失礼しました。

○日枝委員長 ありがとうございます。

結城さんは、第1回も参加されておりますので、大変いい御意見をいただきありがとうございます。

ほかにどうぞ、御意見がございましたら。次、発言しようと思っても、次は残念ながら会合はございませんので、どうぞ、はい。

○友岡委員 フジテレビの友岡でございます。

最後の機会なので、放送についてお話をさせていただければと思います。

ここに一緒に出席しておりますNHKの樋口さんと民放でいろいろ相談をして、放送計画を練ってまいりました。

先月、各局、それぞれ重立ったものの発表はしておりますが、まだ全体像をなかなか皆様には、把握しづらい状態だと思いますが、規模といたしましては、本当に今までにない放送時間を想定しております。夏野委員の中間報告じゃございませんが、民放としましては、リオの規模の約2倍ぐらいの放送時間を計画しております。

量のみならず、視聴者の皆様に残るレガシーとなるような、中継をなし遂げたいと思って準備をしております。

そしてまた、NHKさんはもちろんのこと、我々民放も一部の競技の世界向けの映像制作、国際映像制作というものになっております。日本の放送局の制作力を世界にアピールする絶好の機会とするべく、頑張っております。

そして、何よりここに至るまで、日程、競技時間など、武藤総長、そしてはっぴを着ておられる中村局長には、いろいろ御相談に乗っていただきまして、この場をかりて、改めて御礼申し上げます。

中継のみならず、日々の番組でも、いろんなことを取り上げて、ブームアップに努めてまいりたいと思います。引き続き、皆様の御尽力を賜ればと思います。

僭越ながら以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。ほかにどなたか。

それでは、指名させていただいて、大変恐縮ではございますけれども、いろんな部門から御意見があったほうがいいと思いますので、スカイパーフェクトTVの手塚さん、何か御意見はありますか。

○手塚委員 すみません。手塚です。

ちょっといきなりの御指名であれですが、ちょっと今ぼおっと考えていたんですけども、何かやっぱり世界に発信していくということから考えると、何か日本の持っている強みみたいなものをうまく出せないかなと、ちょっとぼおっと思っていました。

例えば、日本のアニメを書かれるいろんな漫画家さんとか、もうすばらしい方がいらっしやると思うので、その方たちが選手の例えば、肖像、あるとは思いますがけれども、そういうのをいろいろ書いて、それを例えば売ったりしたものを、その後の復興支援のお金に充てていくとか、本来的には、オリンピックの商標を与えるのは多分大変だと思うんですけど、そういうような日本の強みを出せたらいいのかなというのと、あと、日本各地で、特に復興に当たっているところとか、そこら辺にもオリンピックのマークの肖像権とか、そういうものを与えて、中央の物産を売りまくると。それもまた、復興に充てるとか、そ

ういう何かやはり日本の国民が全部一緒にできるようなことを、何か今からでもできることがあれば、ぜひ少しでもやれたら楽しいのかなというふうに、ちょっと思いました。

ありがとうございます。

○日枝委員長 どうぞ、御提案いただければ、事務局が一々うなずいておりますから、多分反映されると思いますので、どうぞほかに、御遠慮なく。

こう見ていますと、目が合っちゃうと、姿勢がこうなりますから、じゃあ、藤丸委員、どうですか。

○藤丸委員 TBSの藤丸です。

私は、小・中学生の絵のポスターなどなど、あと、復興に関する24ページにある復興に関する取組の復興モニュメントにも参加させていただきまして、すごく組織委員会さんが周りを巻き込んでいろんなことを、すごく広めようということが、すごくわかって、すごく大変なところをやっているなどは思ったんですけども、一つ、レガシーとして残すのであれば、私も小学生の子どもが二人おりますけれども、今、すごく授業の中でオリンピック・パラリンピックの授業が取り込まれているんですけども、この東京2020大会だけで、その授業が終わるのではなく、この先も引き続き、オリンピック・パラリンピックに関連して、スポーツだけではない文化とか、テクノロジーだったりとかの授業を引き続き、どこかで続けていけたらいいなど。

もしかしたら、この組織委員会ではないのかもしれないですけども、そういったことを続けていけたら、人々の健康にもつながるし、これからのオリンピック・パラリンピックの機運醸成にもなるのかななんて思いました。ありがとうございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。

樋口さん、何かございませんか。

○樋口委員 このアクション&レガシーレポートをこれからまとめていかれるということで、私ちょっと思ったのは、我々も何か取組をしたときに、こういったレポートをまとめるんですけども、やはり、まずこんな柱でやると、具体的にこういうことをやって、数字の上では、こういう成果があったと。非常によかったという見方に、ついなってしまうんですけども、正直に言いまして、今、非常にいろんな成果を十分上げていると思いますので、むしろこれから先、ひよっとすると札幌ということもあるかもしれませんが、それ以外にも、また日本で大きないろんな取組があると思いますので、むしろもっとこういうことをすればよかったんじゃないとか、さらに深まったのではないかと、ちょっと

あまりきれいにまとめることを考えずに、そういったことも含めて、レポートの中に盛り込んでいたほうが多分、先につながるのではないかなというふうに思います。

ちょっと僭越な言い方で申し訳ないんですけども、そういう印象を受けました。

それと、先ほど、友岡委員のほうからNHKと一緒に、いろいろ競技映像の中継に取組という話がありましたけれども、NHK、NHKという言葉があったので、何かむしろ、うまくいっていないんじゃないかと思われた方いらっしゃるかもしれませんが、そんなことなく、NHKと民放で非常に協力体制、うまくやって今進んでおります。現実には、大会の現場もジャパンコンソーシアムということで、一緒に取組ということで、今、既に具体的な作業も進めているところですので、皆さんに、楽しんでいただけるベースとなる中継のところはNHKと民放で協力してしっかり取り組んでまいりたいというふうに思っています。

それと、NHKの場合、パラリンピックのほうも、そこは競技映像の中継を届けるということで、いろいろ準備を進めておりますので、また、御理解、御協力のほうよろしく願いいたします。

以上です。

○日枝委員長 ありがとうございます。

それでは、目線が合いませんでしたが、安藤さん、どうぞ。すみません。

○安藤委員 TBSの安藤といいます。

今、樋口さんがおっしゃったように、私もここまで来るのに、結構いろんなことがありましたよねという思いがあります。それは表に出ている直近で言えば、札幌でマラソンが開催されるということ自体、皆さん、じくじたる思いをしている方も多と思いますけれども、そういうプランにどろどろとした部分をやっぱり書かないと、いけないんだろうなというふうに思います。

このメディア委員会、テレビ局とももちろん民放、NHK、テレビ局、それと新聞。ちょっとスタンスが違う人がやっぱり多過ぎるんだと思います。

我々民放、NHK、JCは、高いお金を払って放送権を買って、放送に挑もうとしていますが、正直に言えば、民放はかなり赤字を背負うことになります。そういう中で、オリンピックをやっていくことの意義というのは、我々は考えなきゃいけないんですけども、そういう点も踏まえて、じゃあ、マラソンが札幌に行っちゃったことはどうなのかとか、いろんな問題が実は内包しています。

読売新聞の結城さんなんかは、大変よく御存じだろうと思いますけれども、みんなが同

じスタンスで取り組めるとは必ずしも限らないメンバーがいるという状態の中で、一つになって東京大会を成功させるための提言をするんだというスタンスは、間違いなく変わらないというか、いいことだと思うんですけども、それぞれにやっぱり問題を抱えていたという部分については、やっぱりきちんと反省していかなければいけなくて、そういう部分がかもしかして、アクションプラン・レガシープランに盛り込む必要があるかどうかわかりませんが、そういうことをきっちり発信していかないと、簡単に言えば、IOCになめられるということでございますと僕は思います。

そういう点、少しでも表に出せたらいいんじゃないかなと思います。

ちょっと僭越ですが、失礼しました。

○日枝委員長　じゃあ、会長どうぞ。

○森会長　とてもいい御発言でした。それに私が一番お答えをしたいんですよ。だけどできないんです。

やっぱり今、ingですから。進んでいますから、何か言えば、誰かを批判しなきゃいけないことになる。その後、皆さんにまた協力を仰いでいかなきゃいけない。だから常に、オブラートに包んだことしか申し上げられない。

札幌なんかのことは衝撃的ですが、しかし本当に暑さ対策というのは、これで絶対大丈夫ですかと言われたら、誰も確信を持って大丈夫だとは言えない。後は、おてんとうさま次第ということでしょう。

それは、結局ドーハで、あれだけの人が倒れちゃった。ドーハと東京では違うかもしれませんが、条件がよく似ていて、走っている人の4割が担ぎ込まれた。バッハは瞬間的にこれは移すしかないという決断をされた。そのときの電話はこちらへ直接入ってきました。私と、総長とでお聞きしましたが、私もそりゃむちゃくちゃなことだよという反面、ああ結局これしかないんだなという、そのときやっぱり感じがしました。こうなったら、俺、泥をかぶってまとめざるを得ないわなというふうになりました。

そのとき、あれがこうだと、これがこうだというようなことを言っちゃうと、やっぱりその先にあったという人もいましたね。先に言ったらまとまったのかどうかということ言えるわけです。だから、後からこれをドキュメンタリーで全部扱うというのは非常にいいことだと思います。これを途中で申し上げにくいこといっぱいありますね。

一番、私は最初にぶつかったときは、8万人のボランティアというのをどうするのかという、これは一番最初から苦労しましたが言いにくいですよ。名前は言いませんが、メディ

アの中で、新聞の中で社説に書いてあるのありましたよ。学徒動員じゃないかとか、組織委員会六千何百億も集めているんだったら、金を払ったらいいじゃないかとか、なにけちけちしているんだよとか、強制労働とまで書かれた新聞の論説ありましたよ。それは今、東京で発行されている全国紙だよ。我々は何と答えていいのかね。

それが、ボランティアという文化をどうやって日本に醸成をしていくのか、根づかせていくのか。地震だとか、災害があったときに、我も彼もみんな行ってやってくれるときに、みんなよくやってくれました、すばらしいとみんな言うはずだ。その学生たち、手伝ってくれる人たちが帰るときに、すみませんけど旅費を出してくれませんか、誰も言わないですよ。

オリンピックだったら、それは金を出してやらなくちゃいけないのか。せめてホテル代ぐらい出してやれよと言うは、非常に人情的にわかるけれども、それをやったらボランティアでなくなる。この辺の判断が最後、だけど後半に行きましたら、多くの皆さんから大体、御支持をいただけるようになりましてけれども、最初、随分これで我々も悩みましたよ。直接、そういう会社に行って、ちょっと文句も言いに行ったこともございましたしね。

なかなか難しいものなんです。この途中のプロセスで何かアクションを起こすというのは、非常に難しいものだというのも御理解をいただいて、今、ありましたように、終わってから全部、それを取りまとめるというのは、とても愉快だと思いますよ。

私は、最近、大変皮肉でも何でも言うのだけど、この石原知事がこれをやろうということから始まって、コペンハーゲンで失敗して、知事はもうやめたと、やめてしまったのを、もう一遍、再度立候補させて、東京を宣言させて、宣言したら、すぐ本当に彼はやめちゃいましたね。それから、猪瀬さん、舛添さん、小池さんと、わずか1年か2年の間に、4人の知事が変わる。主催者が変わるという、これ、こんなことも世界になかったことですよ。恐らくオリンピック史上初のことじゃないでしょうか。

しかし、今それを言えば、じゃあ、誰がよかったのか、誰が悪かったのかということになってしまいますから、これもできるだけふれないように私は時々、講演でこういうことを言うと、うちの職員、役員はみんなはらはらして、それは言わないほうがいいですよと言うぐらいであります。それを言うと初めて、ああそういえば、そうだったねということが始まるんですね。

お金の問題もそうなんです。予算制で武藤さんはしっかりやっていますよ。しっかりやっていますが、これくらいけちな委員会はないですよ。私もいろんな団体、いろんなこと

をやってみましたけども、1兆3千億か何かを使う事業にしては、これくらいけちなあれはない。

実はこの間、各ベニューがあるんですね、競技場。そのベニュー専門の専従者が決まったんです。それにスポーツマネジャーというのがおりまして、これは各競技団体ごとに専門家を入れて、もう組織委員会の中に入れていただいています、もう3年ぐらいになりますかね。やっています。

この皆さんが集まって決起大会をやろうと。いよいよみんなが現場へ出て頑張るんだから、ひとつしっかりやってくれと、我々じゃないよ、君らだよ。バレーボール競技場もサッカー場の競技場も、人によっては、もちろん北海道に行かなきゃいけない人もいるし、それから埼玉に行かなきゃならない人もいる。もうこの晴海とはおさらばですよという、皆さんのそういう、その激励会をやったんです。その激励会を計画したのを私のところに持ってきて、決起大会をやりますというから、ハチマキでもするのかと、いや、そういうことはしません。何をやるんだと言うと、何かやって、演説して、激励して終わりですというから、せめて乾杯ぐらいしたらどうだと言ったら、いや、そういうものを飲んでやるというやり方は、事務総長から固く止められています。みんな激励するんですよ。これから、後何か月頑張って、第一線に行こうという連中に、最後のときには夕方しかも6時過ぎですから、ビールぐらい飲めばいいじゃないかと、私は簡単に考えますが、そういうビールを出しちゃいけないんです。この独立何とか法人はと。そうなのかね、伊吹さん、いないか。

役所だからうるさいと、こう言うんですね、なるほどね。これ、ばらしちゃいますが、何か今週か何か知らないけど、週間某誌が出す記事に、私の悪口が書いてあるんだけど、あいつは無休でやっているかわりに、毎晩飲み食いをしているけど、その経費は全部組織委員会が出していると言うのが出るんですよ。でも、ほっぽらかしてあるんですけどね。

私は、さっき言った、決起大会のビール代と、せめてつまみぐらい用意しろと。その費用は全部僕が払うからと、一体、全体で幾らになるのと言ったら、五、六万ですよというから、それぐらいのこと俺が出すから、それぐらいのことでみんな頑張ってくれるなら、俺10万出すからと言ってやってもらったんだけど、それぐらいのことをしているんですよ。

ましてや、外国の方をお呼びしたり何かしたときの食事を呼んだり、一杯飲ましたりして、だって全部、私か事務総長、個人で払っているんですから。欲しいと思っていないよ。それが我々の立場だと思っていますが、それくらいつましやかにやっているんです。

どこか、ぜひ記録に残しておいてほしいなど。

余計なことを申しあげました。そういうこともあるんです。

○日枝委員長 ありがとうございます。

皆様の記憶に残ると思いますので、ここはひとつ。

小菅さん、何か御意見はございませんか。

○小菅委員 毎日新聞の小菅です。

このレポートに関しては、今、指摘が出たとおりでありますけども、このいわゆる我が社も、パートナーになりまして、自分たちの会社がこのレガシーを残さなきゃいけないという相当なプレッシャーの中にもありまして。

報道では、共生キャンペーンといいますか、もう、ともにというトゥギャザーのキャンペーンで、とにかく、この大会が終わった後、日本が共生社会になるようにというキャンペーンをずっと貼っているんですけども、ようやく我々パレスサイドビルという皇居沿いのビルの中にあるんですけども、そこのビルがユニバーサルデザインじゃないんじゃないかというような批判も受けまして、ようやく多目的トイレというのを何千万か、かけてつくったんですけども、結局もう自分たちの会社もそこから始めて、レガシーをつくるということに今必死になっております。

各参加企業というのも、そこの本当に頭を痛めているというか、必死になっているというところでして、そういう面も含めて、民間も含めてやっぱりこういう取り組んだというレポートをつくっていただきたいと思います。

以上です。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかに御意見はございませんか。

あと、一、二間で多分時間になるとと思いますので、何かありましたら。

もうこういう会議の場というのはございません。

石川さん、どうぞ。

○石川副委員長 私、1972年の札幌オリンピックからずっとオリンピック、現在まで携わってきまして、48年になるんです。こんな長い間やっているのはなぜかと聞かれると、スポーツが好きで、中でもオリンピックが好きだと。そういう立場で申しあげるんですが、この世の中からオリンピックをなくしてはいけないんだ、ということを今強く感じていまして。

ということは、逆に言うと、ほったらかしておいたら、なくなっちゃうかもわからないなという危機感を持っているんです。

これは、もう先ほど来、出ているマラソンの開催地変更の問題もそうですけども、開催都市が一番、開催にふさわしい時期に大会を開けないという、今のIOCが決めているところに問題があるかと思うんです。

その原因として、アメリカのライツホルダーの意向ということが、多分そうなんでしょうね。言われています。だけど、それを変える努力をしないと、もう東京で駄目なら、ほとんどのところで開けなくなるんじゃないかということを考えざるを得ないですね。

これを何とか、もう一度元へ戻せないかということで、つまりオリンピックを生き延びさせるためにという視点から、何かこの第3章、持続可能性のところになるのかもわかりませんが、ぜひ東京からの叫び、世界に向けた叫びということで、訴えていただきたいと、そういうふうに思います。

○日枝委員長 大変貴重な御意見をありがとうございました。

皆様もそういうお考えをお持ちの方もおられると思います。これはぜひ、レガシーの中に入れて置いていただいて、レポートの中に入れるのも一つ御意見だと思います。

ほかに何かございませんか。

はい、どうぞ。

○森会長 私ばかりで恐縮ですが、これは公式の発言ですが、せっかくこれだけのメンバーがお集まりいただいて、会合として、これで終わりだと、何かもったいないし、同窓会でもやるのも変な話だし、時々何か、ちゃんと名目を持って、日枝さん、集められる人が集まるって、このオリンピックを見守っていくということをやります。

失礼ですが、先週、今度できました木材を集めたプラザですけど、御覧になった方ございますか。

どなたも見学されていないですね。結城さん、この間、あのとき行っていらっしやいましたね。非常にユニークです。入るとまず香りがいいです。木の香りがぼわーっというんでしょうか、早目に入らないと消えちゃいますよ。

それから、木材をたくさん使った競技場がありましたけど、何か御覧になった方ありますか。

案外皆さん、何も御覧になっていない。国立競技場は入られましたか。これは入られましたか。

私も意地っ張りで、ラグビーで使えなかったから頭にきちゃって、この間、初めて決勝戦で行って来ました。ラグビーの決勝戦。行ってみましたら一杯問題がありました。

昨日、実は夜、安倍さんにその話を全部しました。官邸が経費を主権をしたばかりに、確かに安くできました。しかし、それがどういう問題になったかというのは、あなた自身御存知ないでしょうと。私はつまびらかに見てきたということで申し上げたら、総理はびっくりしていましたよ。

あと、これは我々で何とかしなければなりません、任してくださいねと言ったら、組織委員会に任すと総理はそう言っていましたよ。金がかかりますよと言ったら、しょうがないと言う。金削ったつもりなんだけど、例えば一つ申し上げると、ロイヤルボックスがないです。結城さん、気がつかないですか。

これからつくるために、今、一生懸命建設協議とかをやりますけど、これを終わったら撤去するという仕組みになっているんです。ちょっと待ってください。国立競技場というのは、ロイヤルボックスがあつていいんですよね。国技館だって、当時、国技館が建てたときに、たった1億円ですよ、文部省から出した金が。たった1億円で、実は博物館の予算を出したんです。それで、国立というあれになっているんです。国の相撲が。ですからそんなことで、これどうするんだという問題もございますし、エレベーターを天皇がお使いになったら、後の大統領たちは、全部、下で待ちぼうけされるという事態になる。これはどうするかという問題がある。

まだまだあります。ですから、一度、皆さん施設を御覧になりませんか。これを僕は日枝さんに、全部同じ日にこれをやれというんじゃなくて、事務局も大変だろうと思いますが、3回ぐらいに分けるとか、江ノ島もちろんございますし、もちろん北海道もございますし、そこまでは大変ですけれども、東京ないし、東京周辺の施設をメディア委員会ツアーというのをやって、まあ2回ぐらいに分けて、御希望の方は一緒にバスツアーでもしていると、夏野さん、また、いいアイデアを出してください。

そういうこともして、皆さんとまたお目にかかって、お話が聞かせたり、聞かせていただいたりという機会を残したらどうかなと思いますけど、ちょっと私の、別にうちの会のあれではなく、私個人の主権で委員長に提案をしたいと思います。

○日枝委員長 大変、いい全生の提案でありありがとうございます。

御希望の方を募って行くということで、確かに見ておられる方もおられると思いますが、見ていない方もおありで、メディア委員会だからと、切符を優先的というのは絶対に

あり得ませんので、なる前に見ておくと。場所を見ておくと。見ておくか、見ておかないかで、やっぱり人に話すとき違うわけで、ぜひメディア委員会の皆さんには、何回かに分けて、バスツアーでもしていただけたらいいなというふうに思います。

ぜひ、事務局、お願いしたいと思います。メディア委員長としても、ぜひこれは大賛成でございます。よろしくをお願いします。

ほかにございませんか。

ないようでございますので、それでは、事務局から事務連絡を含めて、お願いします。

○小林（住）部長 本日も、いろいろな御意見をいただきありがとうございます。

今日いただいた御意見を踏まえ、関係機関、あるいは、組織委員会の関連部署と調整をしながら、皆様にも参画いただき、そしてより多くの方々にも、この東京2020大会に興味を持っていただけるような活動を検討していきたいというふうに思っております。

また、改めまして、ポスターの選考への御協力ありがとうございました。投票に関して、まだいただいていない方、若干いらっしゃるということなので、できましたらこの後、帰りに事務局のスタッフまで投票のほうをしていただければなというふうに思います。

その選考していただいた結果につきましては、後日、表彰式の詳細と合わせて、皆様に御連絡させていただきます。

また、集計の結果、得票数が同点の作品があった場合、こういった場合には、その判断、同着、議員が2名とかというケースも過去にございますけれども、その判断は、日枝委員長に一任させていただきたいと考えておりますが、よろしいでしょうか。

（異議なし）

○小林（住）部長 それでは、委員長に一任ということにさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

あと、最後に、御連絡、2点ございます。

本日、お配りしています資料、議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページで公開させていただきます。

また、今後のメディア委員会につきましてはですが、既にお話がありましたように、このような形でお集まりいただいて議論するというのは、最後になるかと思えます。

先ほど御提案いただきましたように、会場を一緒に視察していただいて、いろいろ御意見をいただく場とか、あるいは、アクション&レガシープランの案を皆様に事前に見ていただいて、それに対して、御意見をいただく等のことはございますので、引き続き御協力

をよろしく願いいたします。

いよいよ、大会も本番を迎え、来月からは、聖火リレーも始まります。今後とも、御支援、御協力をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

○日枝委員長 ありがとうございます。

冒頭、申し上げましたように、10回にわたるこのメディア委員会も、今日で、一応こういう会議は終わりでございます。

森会長からお話のように、もしできれば募集をして、国立競技場とか、いろいろなところを見て回る。我々見ていないで、メディア委員会というのはいかかなものかなと思いますので、もし御参加の方ができるように、事務局一つお取り計らいをお願いしたいと思います。

本当にありがとうございました。